

縄文文化を育んだ八ヶ岳山麓

平成 29 年 3 月現在、茅野市には 348 か所の遺跡があります。そのうち 237 か所が縄文時代の遺跡で、そのほとんどが豪華な装飾の土器や「縄文のビーナス」の愛称をもつ国宝「土偶」がつくられた中期（約 5000 年～4000 年前）の遺跡です。

縄文時代中期は、気温が今と同じかやや高く、生活しやすい環境が整って、中部地方から関東地方を中心に集落が急増しました。なかでも、八ヶ岳山麓の標高 800 m～1000 mにかけて爆発的に集落が増えました。

なぜ、八ヶ岳山麓のような高地に多くの遺跡が残されたのでしょうか。3 つの理由が考えられます。



豊富な動植物

八ヶ岳山麓には、今でも、クリ、ドングリ、クルミなどの堅い殻の実をつける落葉広葉樹の森が広がります。豊かに実る木の実や木の芽、山菜、キノコなどをはじめ、シカ、ノウサギ、キジ、カモなどの動物もたくさん生息しています。谷間の小川には、アマゴやイワナの姿を見ることができます。

これらの動植物は、縄文時代の人々の食料となり、衣服や住まいの材料にも利用されました。

八ヶ岳山麓の豊かな自然の恵みは、縄文時代の人々の知恵と工夫によって、「衣食住」にいかされました。

集落づくりに適した地形

八ヶ岳の麓^{ふもと}には、富士山のように広大な裾野が広がります。八ヶ岳に発する水は、幾筋もの川^{いくすじ}となり、裾野を流れ下りながら放射状に谷を刻み、谷と谷の間に長峰状の台地を形成しました。

縄文時代の人々は、日当たりのよい台地に集落をつくり、わき水や小川のある谷を共同の水場^{かん}として生活していました。また、この谷は、限りある自然の恵みを分かち合うための、集落の境界^{かん}（緩衝^{しやうたい}帯）としての役割を果たしていたと考えられています。

住まいに適した台地と生活に欠かせない水。そして、それぞれの台地をひとつの単位として集落を営むことができる地形。八ヶ岳山麓は住環境に恵まれていました。



本州最大の黒曜石の原産地

金属を知らない旧石器時代と縄文時代の人々にとって、天然ガラスである黒曜石は、刃物などの道具をつくる材料として最適でした。

北八ヶ岳から霧ヶ峰・和田峠にかけての一带には、本州最大の黒曜石原産地があります。霧ヶ峰・和田峠周辺の原産地では、地下に埋まった黒曜石を得るために、長期間にわたって人々が地面を掘ったくぼみが見つかっています。霧ヶ峰産の黒曜石は、その優れた品質もあり、北は北海道、西は三重県まで運ばれています。

縄文時代の人々が大切にしていた黒曜石の原産地に近いことも、多くの遺跡が残された理由のひとつと考えられます。



縄文のビーナス

ここがみどころ

頭部

文様がつけられているのは主に頭。右と左では文様が違います。渦巻文が多いのも特徴です。さて、渦巻はいくつあるでしょうか。

顔

切れ長のつり上がった目、おちょぼ口は、八ヶ岳山麓の縄文時代中期の土偶の特徴です。とがった鼻には小さな穴がつけられています。ハート形に縁どられた顔は、お面を被っているようにも見えます。

耳

穴が貫通しています。耳飾り（ピアス）をつけた状態を表現していると思われる。

縄文人も見ていたかも

右胸のヒビと左耳近くの欠損は、その状態から、縄文時代に生じたものと考えられます。

キラキラ雲母

胸の辺りで光っているのは雲母です。雲母を多く含む砂を粘土に混ぜたと思われる。

なでてみたいな。

ぴかぴかお肌

磨き上げてから焼いています。

へその穴

へその穴は深く、およそ1.8cmあります。へその緒を意識しているのでしょうか。

お腹

大きく張り出したお腹は、臨月を迎えた妊婦さんのよう。集落の人々は、この姿に安産や子孫の繁栄を願う気持ちを込めたのでしょう。

腰からお尻

安産が約束されたかのような、豊かな張り。妊婦さんの体型の変化と、生命を育む神秘を見事に表現しているように思えます。

脚

脚があり自立する土偶は中期に出現しました。この土偶は、右脚が左脚よりも少し短く、右脚の腿が少し前に出ている。歩きだそうとしているかのようです。

股

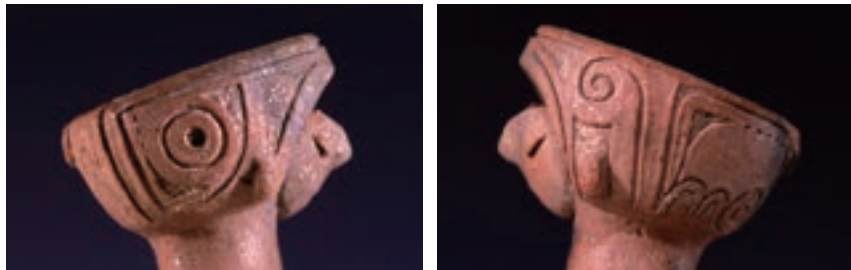
脚の付け根に向かって削り取られた弧状の五角形は、女性であることを表現しています。



深くていねいにつけられた頭部の文様

左右で違う側頭部

右側に同心円を三角形の刻文で囲んだ文様（玉抱き三叉文）、左側にワラビ手状や三角形の刻文などがあります。



頭頂部



頂部が平らで、中心のくぼみから太い渦巻が描かれていることから、髪型であるとも、帽子を被っている姿ともいわれています。渦巻の線は側頭部まで下がっています。

後頭部

円形の突起は、髪を結った表現でしょうか。突起と接する頂部の端に細く深い穴があります。何のために開けた穴でしょうか。突起の右横には、下書きともいえるような細い線で、凹凸文様が描かれています。



穴の位置



見事なボディライン

後ろ姿

後ろから見た、逆ハート形のおしりが魅力的です。1998年にフランスで開催された展覧会のポスターでは、正面でなく、後ろ姿が起用されました。



横姿

横から見た、背中からお尻にかけての曲線は見事です。



仮面の女神

ここがみどころ

逆三角形の仮面

仮面かぶを被ると人間でないものになるのでしょうか？ 目のような線の両端にある小さい穴は紐を通すための穴？

鼻の穴

仮面なのに鼻の穴！



ひも 仮面の紐

仮面をとめる紐を、後ろでしばっているようにみえます。

腕の上にも文様が



妊婦さん

腹部はあとで粘土を足してふくらませています。乳房はないけれどこの土偶も妊婦さん。

へその穴

体内につながり、へその緒おを意識しているのかもしれませんが。

黒い光沢

表面をよく磨き、黒く仕上げる製作法は、後期の人々が好んで用いました。



あかし
女性の証

身体の文様

渦巻き、たすき掛けや同心円等の文様が、乱れることなく深くていねいにつけられています。これらの文様は、ボディペインティングいれずみか刺青か、それともVネックの服を表現しているのでしょうか。

ちゅうくう
中空土偶

この土偶は、土器と同じ輪積み法^{わづみ}でつくられ、内部が空洞になっています。頭頂部・首の左右・お尻・両足裏・へそに、内部につながる大小7つの穴があげられています。いくつ見えますか。



内部に残る輪積み痕



内部が空洞であることを示すレントゲン写真



足の裏

あじろ
網代痕

足裏の網代痕から、この土偶が敷物の上でつくられたことがわかります。網代の向きが左右で違います。別の網代をそれぞれの足裏に敷いたのでしょうか。

網代とは… ササなど植物の細い薄板を互い違いにくぐらせて編んだもの(p.34)。



穴

普段は見えない足裏の穴は、焼くときに内部で膨張した空気を逃がす穴とされます。

国宝 土偶 発見時のエピソード

土器じゃない、頭だ！ 縄文のビーナス

「ここに三叉文さんさもんのついた土器が埋まっています。豪華な装飾の土器かもしれません。ここを掘ってください。」現場担当者の指示でベテランの発掘作業員が周りを掘りはじめた。すぐに渦巻き文様のある平らな面が見えた。「どうやら土器ではないようです。物を乗せる台座のようなものではないでしょうか。」この報告を受けた担当者は、作業員と慎重に周囲の土を取り除いていった。



出土した穴

すると次に吊り上がった切れ長の目が現れた。「これは土器じゃない。顔だ。土偶の頭だ！」

のちに「縄文のビーナス」の愛称で呼ばれる土偶の発見の瞬間である。昭和61年（1986年）9月8日、秋の陽が山の端に落ちかかる時刻、その日最後の夕陽を浴びて、土偶は全体像を現した。



「三叉文」のある土器



縄文のビーナスの「三叉文」

これまで、市内をはじめとする各地の遺跡からたくさんの土偶が出土していたが、27 cmもある大形の土偶が、壊されることなくほぼ完全な形で埋められた状態で見つかることはなかった。ことの重大さから万が一に備え、土をかけたりして、その日の作業を終え、翌日に出土状態の記録を取ってから掘り上げることにした。



最初に見つかった部分

その後、縄文のビーナスは教科書をはじめさまざまな書籍に掲載された。そして国内のみならず海外の展覧会に出品された。妊娠中のふくよかなプロポーション、新たな生命を育む喜びはぐくと、母親になる女性のあたたかな気持ちが伝わってくるような雰囲気ふんいきが人気を呼び、だんだんと知名度が上がっていった。

土器に足を突っ込んだ土偶!? 仮面の女神

平成12年(2000年)8月23日、楕円形の穴を掘り下げていた発掘作業員が、黒い尖ったものを発見した。掘り進むにつれ、それはふだん目にするような土器とは明らかに違うものであると感じた。前日、隣の穴から死者の顔に被せた浅鉢形の土器が見つかったこともあり、異変を感じた発掘作業員は現場担当者を呼んだ。



小形土器と見間違えるほど大きな脚

現場担当者は、瞬時に「仮面をつけた土偶」であると直感した。慎重に周囲の土を取り除き、おおよその全体像を把握したところで、市役所の文化財課に第一報を入れた。「小形の土器に足を突っ込んだ土偶が見つかりました。」のちに、小形の土器は胴体から離れた右脚と判明するが、足の大きさから小形土器と見間違えたのも無理からぬことであった。

直ちに、土偶を掘り上げるまでのスケジュールが検討された。当時の尖石縄文考古館名誉館長である故戸沢充則先生とさわみつりのの指導のもと、8月26日に記者発表、30日に土偶が出土した状態のまま現地を公開することを決めた。記者発表が終わるまでは土偶の発見を口外しないと申し合わせ、現場担当者や民間の警備員が「寝ずの番」をして土偶を見守った。



仮面の女神を見ようと集まった人々

記者発表により、土偶発見の様子が地元紙はもとより中央四大紙でも大きく取り上げられ、そのためか公開日当日はヘリコプターが上空を飛ぶなど、ものものしい雰囲気となった。土偶を一目見ようと、4000人もの見学者が炎天下に長蛇の列をつくり、なかには大阪からバスをしたてて来た団体もいた。



仮面の女神を取り上げた瞬間

予想をはるかに超える数の見学者に、現場担当者は、20人ほどに分けたグループに同じ解説を200回以上繰り返し、裏方は誘導や駐車場の整理に奔走したほんそう。その日のことは、いまだに多くの市民に語り継がれている。

宮坂英弑と尖石遺跡

縄文集落の姿はどのようにして明らかにされたのか？

今から約5000年～4000年前、尖石の台地で生活を営む人々がいました。しかし、長い年月の間に土に埋もれ、その様子はわからなくなりました。

昭和の初期に、土器や石器に魅かれ、この尖石遺跡で発掘をはじめた人がいます。遺跡がある豊村（当時）南大塩出身の宮坂英弑です。

昭和5年（1930年）から、土器・石器の発掘→炉址の発掘→住居址の発掘→集落址の発掘、と調査を進め、その成果をもとに日本ではじめて縄文集落の姿を明らかにし、戦後間もなく（昭和21年（1946年））、集落の構成や成り立ちにせまる論文を発表しました。尖石遺跡は「縄文時代集落研究の出発点」となる遺跡といわれています。

遺物（土器・石器）発掘時代 林道からはじまった発掘



昭和初期の尖石遺跡。この林道の両脇を中心に土器や炉址を発掘しました。



土器に見入る宮坂英弑と長男の吉久雄。後に尖石遺跡のシンボルと呼ばれる「蛇体把手付深鉢」（口絵）がほぼ完全な形で出土しました。昭和8年（1933年）。



炉址発掘時代 54か所の炉址を発掘



尖石遺跡で発掘された土器を伴う石囲炉。第1号炉址。昭和5年（1930年）。

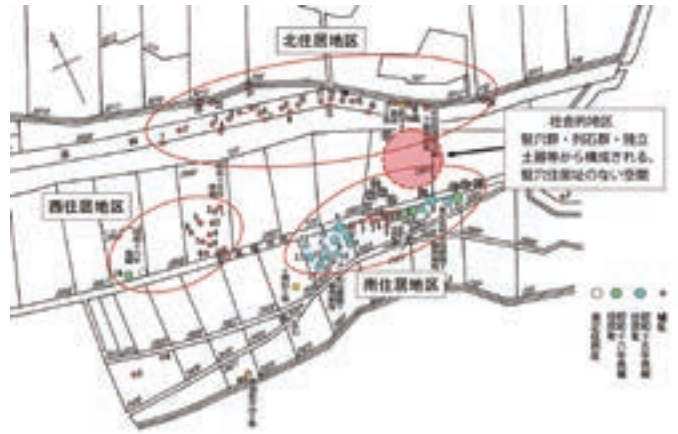


地面にボーリング棒をさし、炉石を探す宮坂英弑。

集落址発掘時代

「社会的地区」の発掘

住居址があると考えていた場所から（●）、^{だてあな}竪穴群・^{れいせき}列石・^{おほがたうめがた}大形埋甕を^{はらひ}発掘します。宮坂英弼は、ここを集落共有の「社会的地区」（マツリに使われた広場、共同墓地）と考え、これをはさむ南北2つの「住居地区」から尖石集落が成り立っていると考えました（のちに「西住居地区」が加えられました）。



「諏訪郡豊平村尖石遺跡発掘調査図」 勅使河原 2004 『原始集落を掘る』に加筆
茅野市教育委員会 2016 『特別史跡尖石石器時代遺跡保存管理計画書』

日本ではじめて 縄文集落の姿が明らかに



石でふたをした、口径 60cm、高さ 70cm の大形埋甕を掘り出しているところ。
昭和 17 年（1942 年）。



飛び石状に並んだ列石と竪穴。
昭和 17 年（1942 年）。



尖石遺跡で発掘された第 1 号住居址。
昭和 15 年（1940 年）。

住居址発掘時代

32か所の住居址を発掘

炉址の周りから床と柱穴を見つけ、住居址の存在を確認します。
昭和 11 年（1936 年）。

食

四季折々の食料

ハヶ岳山麓の豊かな森とわき水は、多様な生き物を育みました。縄文時代の人々は、それらの動物や植物を食料に利用するための知恵や工夫を積み重ねていきます。

シカやイノシシを狩り（狩猟）、クリやドングリなどの木の実を集め（採集）、川で魚を捕りながら（漁労）、四季により獲れるものを知り、食べられるものの種類を増やし、冬に備えた保存食をつくり、長い年月をかけて自然を最大限に活用する術を身につけていきました。

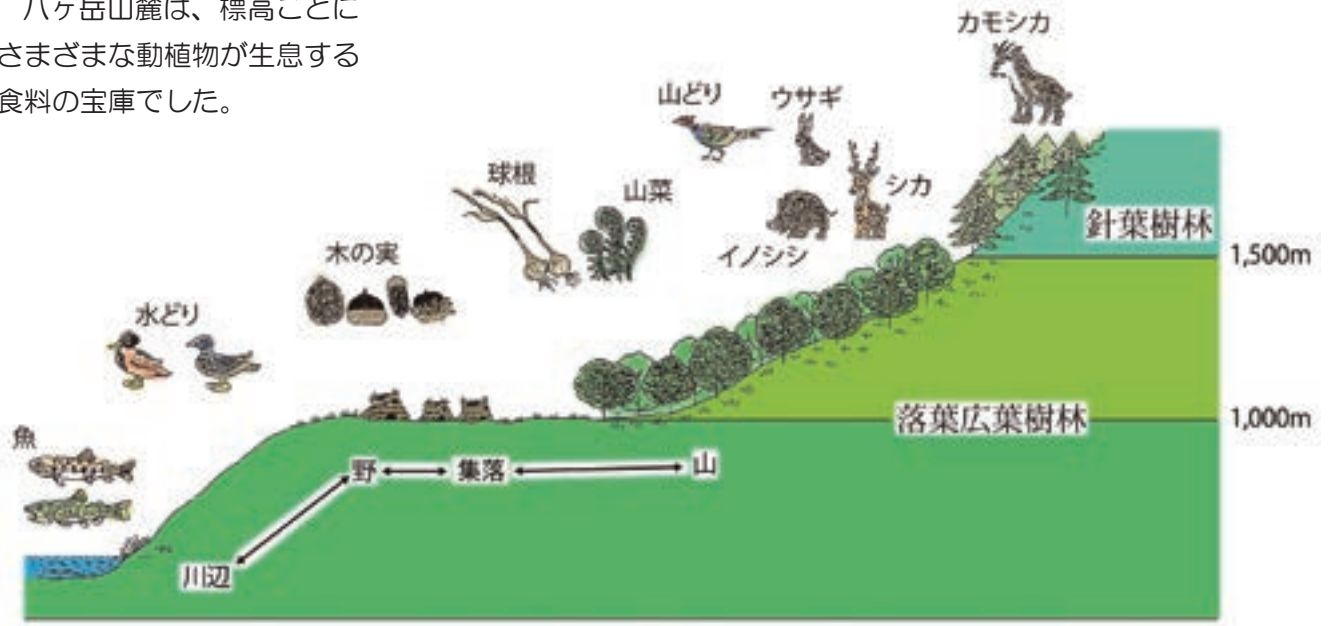
縄文食のカレンダー



茅野市内の縄文時代の遺跡から発見された食料とその痕跡、人々が食べていた可能性のある動植物の一部をカレンダーにしました。

縄文食の垂直分布図

ハケ岳山麓は、標高ごとにさまざまな動植物が生息する食料の宝庫でした。



遺跡に残された動物の骨



とちぎ県いわけ 栃窪岩陰遺跡（北山柏原）
なかばら 中原遺跡（豊平福沢、湖東下菅沢）

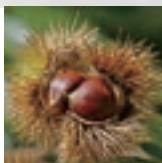
北山地区にあるとちぎ県いわけ 栃窪岩陰遺跡から、縄文時代の終わりの獣骨がたくさん出土しました。アルカリ性の灰に覆われていたため、普通は残らない骨が見つかり、とりわけシカが多いことがわかりました。

遺跡から見つかった木の实

アク抜き ●不要 ●必要 上：遺跡から出土した木の实 下：現生の木の实



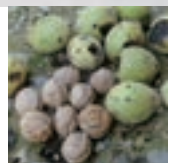
●クルリ



●ドングリ
(コナラ・ミズナラ)



●クルミ



ハケ岳山麓の落葉広葉樹林から採れるクルリ、ドングリ、クルミ、トチなどの木の实も大切な食料でした。縄文時代の竪穴住居址や貯蔵穴などから、炭化した状態で見つかっています。これらの木の实を中心に、山菜、木の芽、球根、マメ類、果物、キノコなど、季節ごとに採れる植物を食べていました。